

# 日本的コミュニケーション：特性と問題点：日本文化の英語化をめぐって

著者	遠山 淳
雑誌名	日本人と英語：英語化する日本の学際的研究
巻	14
ページ	119-127
発行年	1998-03-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00005938">http://doi.org/10.15055/00005938</a>

# 第12章 日本のコミュニケーション：特性と問題点

—— 日本文化の英語化をめぐる ——

遠山 淳

## はじめに

英語から日本語への影響は増大するばかりである。異文化コミュニケーションを研究する者として、この問題について少し考察してみたい。「異文化コミュニケーション研究」の見地から、ということとは、「文化とコミュニケーションの関係を明らかにしつつ」という意味である。

はじめに、少し整理をしてみたい。文化とは帰属集団の成員個々の脳内にある「集団の論理」である。それは価値観とか行動様式となって、社会に共有（ヨコのコミュニケーション）され、継承（タテのコミュニケーション）される。学習とは、コミュニケーション行為の一部である。文化は情報の所相として、またコミュニケーションは情報の能相として相互に関わる。文化とは現象であり、その実体は情報である。また、コミュニケーションとは、現象と実体、すなわち文化と情報の間を取り持って、両者の関係を機能化さす行為をいう。そして個別文化とは、つまるところ、情報の偏在化現象なのである。

人は自文化の呪縛から逃れることはできない。自文化を引きずって生きる「文化コミュニケーター」なのである。新情報や異文化情報に対しては、コミュニケーション行為にフィルターが掛かりチェックされるが、旧情報や自文化情報にはフィルターの目も粗くノー・チェックで通過する。人間にはこのような「文化フィルター」機能が備わっている。

文化変化研究のために言語の分野を対象とする場合もある。しかし文化を写しだす「鏡」としては、言語よりは、コミュニケーションの方がむしろ精度は高いといえる。

以前、良寛禅師になる『戒語九十ヶ条』を用いて、江戸末期のコミュニケーション・エッセックス（「コミュニケーション文化」と呼んでもよい。）が現代日本のそれと変わっているかどうかということを小論にまとめたことがある。江戸末期、明治、大正、昭和を経て、日本語が大きく変容したのに比べて、コミュニケーション・スタイル（型）はなかなか変わらない。言語に比べて、コミュニケーション文化はとても保守的なのである。

### 1. 文化の生成：情報・文化・コミュニケーション

文化の生成または変化を考えるにあたって、研究者たちが従来踏襲してきた「文化とコミュニケーション」という2者を立ててその相関関係を追及するのではなく、それに「情報」も加

えて、3者関係で説明する方が、正確であるし理解がしやすい、と筆者は考える。

中国仏教に興味深い考え方がある。『大乘起信論』にある三大である。心の本体（体）、すがた（相）、はたらき（用）の3要素をいう。同一のものを対象としながら、3方面からみる。コミュニケーション論の立場からいえば、情報（体）、文化（相）、コミュニケーション（用）に相当する。またキリスト教においても、三位一体説は神格（person）をめぐって、しばしば異端派を出した。父なる神、子なる神、聖霊はそれぞれ情報、文化、コミュニケーションに相当するといえよう。

また仏教では人間存在を五蘊仮和合という。つまり、色、受、想、行、識という人間の肉体と精神を5つの集まりに分け、それらが仮に和合した状態において存在し、五蘊は無我であると説く。文化とは五蘊であり、「相」として仮に和合して存在する。五蘊皆空であり、その「体（本体）」は情報である。情報の仮和合である。コミュニケーションは「用」としてはたらき、情報を文化に変え、また文化を情報に変える。この関係を数式化するならば、

$$C=f(I) \text{ および } I=f(C)、\text{ または } n \text{ 時点における関係は } C_{n-1}=f(I_n)$$

となる。ただし、 $C$  = 文化、 $I$  = 情報、( $c$  = コミュニケーション = 媒体) である。コミュニケーションは情報と文化の間に介在し、機能化 ( $f$ ) の媒体としてはたらくので数式の表面には現れない。

以上の考察から得られる文化の定義は、「文化とは、特定の時空環境内において、連鎖的情報選択 / 淘汰を含むコミュニケーション行為の累積的・複合的過程によりつくりだされた最も広い意味での人間の生き方に関する制御プログラムである。」また、コミュニケーションの定義は「コミュニケーションとは、獲得された情報の機能化のプロセスである。」としたい。情報の定義は、広義には、「情報とは、意味を持つ記号の集合である。(吉田民人)」

人間のコミュニケーション・モデルについても、昨今の分子生物学や脳生理学の研究に呼応して、コミュニケーション研究の分野においても、人類が獲得しているコミュニケーション系（遺伝子系と脳神経系）のうち、後者に基づいた「脳神経モデル」の開発と転換が急がれる。もはや「電話モデル」でもあるまい。

## 2. 情報代謝モデルとコミュニケーション型

情報代謝モデルは、情報の誕生と死滅、変化に対応した文化の生成過程に着目した情報処理論からのコミュニケーション過程解明への試論（私論）である。このモデルについては既に発表済みなので、ここでは詳細は省く。理論構築の考え方を少し整理して示してみたい。

基本的には、情報は離合集散を繰り返す、という経験則に基づく。情報に安定の期間が仮にあっても、マクロに見ればそれは変化の繰り返しである。人間コミュニケーションが遺伝子で形成された脳神経系を用いてなされているということは、脳内の機能はパタン化されているということである。「意味を持つ記号の集合」の処理が形式化されていることを意味する。記号とはパタンなのである。

脳内の意味伝達はニューロン間のシナプス伝達で行われる。ニューロンは相互に回路をもち1～1,000個にも連結している。結合の方法も単純ではない。電気的でもあり化学的でもある。これらのパタンを解明できないものだろうか。

情報内容の変化はどのようにして起こるのだろうか。他の情報と遭遇し化学変化を起こすのか、それとも吸い取られてしまうのか、それとも他の情報には知らぬ顔を決め込み、変化をしないでそのままているのか……

情報代謝モデルでは、コミュニケーション・スタイルの類型化に基盤を置き、これをコミュニケーション型と呼んでいる（図1～3を参照）。類型化の作業はまずコミュニケーション原型（反発と吸引のセット）という電気的モデルを置いた。次いで、コミュニケーションの志向性（片立型、両立型、同立型、創造型）を考え、それぞれの基本型を設置した。それぞれの変化型については、現在準備中である。

このモデルで最も重要な点は、コミュニケーション行為者の片方または双方にどのような変化が起こるかということである。コミュニケーション終了後の精神（情報）に変化はあるのか。または行動に変化は起きるか。どの程度の変化が発生するのか。

コミュニケーションの志向性には、4種の型が認められる。そのうち、特に片立型と両立型はコミュニケーションの根幹をなす情報処理過程である。これら両型は対照的な特性を持っている。

コミュニケーションは情報の交流を目指して、まず情報コードで行われることが多いが、片立型志向では、情報コードで始まり情報コードで終わることが比較的多い。これに対して、両立型志向では、情報コードが始まっても、情報源コードで終了してしまうことが多い。上からの命令とか甘えとか、人間関係を持ち込んだり、信頼度が高いと思われるもの、例えば新聞とか、テレビとか、先生とか、お兄ちゃんの話とかに頼って、自分の情報をつくらないで、情報源への信頼とか力関係を持ち込んで決着を付けるのである。人間関係が悪い場合には、情報源コードに始まって情報コードに終わるといったコード変換も見られる。

コミュニケーションを支配するものとして、コミュニケーション動因がある。2種の動因が認められる。勝ち負けに拘るヘゲモニー型と損得に拘るインタレスト型がある。実際のコミュニケーションはこれらの2種の動因を組み合わせると拍車がかかる。①勝、②負、③得、④損のうち、①勝+③得、①勝+④損、②負+③得、②負+④損の4種の組み合わせである。

コミュニケーションの志向性

片立型： $A+B \rightarrow A$  or  $B$

両立型： $A+B \rightarrow A$  and  $B$

同立型： $A+B \rightarrow 2A = 2B$

創造型： $A+B \rightarrow C$

図1

コミュニケーション原型

反 発

A \_\_\_\_\_

B \_\_\_\_\_

吸 引

A \_\_\_\_\_

B /\_\_\_\_\_

図2

志向性	型	C	過程			フロー	変化					
			開始	中	間		終了	精神	行動			
①片立	対立	A					—	なし	なし			
		B						—	なし	なし		
②片立	同化	A						—	なし	なし		
		B							—	あり	あり	
③片立	統合	A							—	少し	少し	
		B								—	少し	少し
④両立	分立	A						—	なし	なし		
		B							—	なし	なし	
⑤両立	同化	A							—	なし	なし	
		B								—	なし	少し
⑥両立	統合	A								—	なし	少し
		B									—	なし
⑦同立	合同	A							—	なし	なし	
		B								—	なし	なし
⑧創造	異化・統合	A								—	あり	あり
		B									—	あり

図3 対人コミュニケーションの8基本型：情報代謝アプローチ

これら4種の組み合わせから最も望ましいものと最も望ましくないものを選ぶのは優しい。問題は2位と3位である。「勝損」を選ぶか、それとも「負得」を選ぶか。要するに、損をしても勝ちたいか、それとも負けてもいいから得をしたいか、のどちらを望むかである。「武士は食わねど高楊枝」派かそれとも「負けるが勝ち」派か。東京人や京都人には「武士は食わねど…」派が多いようだし、大阪人には「負けるが…」派が多いようだ。人には頭を下げながらしっかり稼ぐのである。タテマ人間とホンネ人間の違いであろうか。

最後に考えなければならないのがコミュニケーション能力（Communication Competence）である。発信能力と受信能力のセットでコミュニケーション能力がはかられる。日本というコミュニケーション環境においては、日本人は一般に発信能力は低い、受信能力は極めて高い場合が多い。アメリカ人などにはこの逆の場合が多い。したがって、この両者の組み合わせは、典型的な例として、アメリカ人が喋りまくり、日本人が聞き手に終始するケースが多くなるのである。この逆は、むしろ例外的であろう。

### 3. 日本のコミュニケーションの特性 —— 英米型コミュニケーションとの比較 ——

#### (1) 両立型コミュニケーションの多用

日本人は両立型を用いることが大変多い。情報そのものを得るためというより、人間関係に気を配りながら、自分の意見の押し売りにならないように、相手の意見も部分的に認めながら、時間をかけて話し合う。一方、英米では片立型を多用する。イングランド人は片立型統合/対立を用いることが多い。またアメリカ人は片立型同化/対立を主として用いる。情報コード上でコミュニケーションをし、コード変換をすることは少ない。

#### (2) アチラとコチラ：シマ的不連続体としての海

不連続体としての海が、海の彼方であるアチラとウチなるコチラとを峻別し、高度文明である海外、シマ的未発達、遅れたコチラという構図である。同じ島国である英国にこのような孤立した孤島意識はない。海は連続体として意識され、大陸国家と変わらない。アメリカも、むしろ進んだコチラに対し、遅れている海の彼方というのが一般的である。

#### (3) コミュニケーション動因

日本国内における地域差は存在するが、海外諸国と比べれば、日本全体は、インタレスト型である。「負+得」型に人気が集まる。最初から No. 2 を志向したり、女房役に徹する会社人間も多い。「稔るほど頭を垂れる稲穂かな」とか「花より団子」である。英米に見られるヘゲモニー型の「勝+損」型志向では、トップ志望の人間が多いが、「勝+得」を志して得られなかったときに次善の策として取る方略である。「武士は食わねど高楊枝」の世界である。

#### (4) コード変換

日本人のコミュニケーションを観察していると、実に頻繁に情報コードから情報源コードへと変換するのが分かる。それは不承不承の同化をしたときに起こりやすい。両立型の同化の特徴なのである。一方、片立型同化は「無条件降伏」型なので自説を残す余裕などない。情報コード上のみで終始する。

#### (5) 言行の乖離：ホンネとタテマエ

両立型の常として、「言っていること」と「すること」に齟齬をきたしやすい。心からの同化でなく、不承不承の同化なので、行動にまで縛りがかけられないのである。一方、片立型では、同化して得た新しい情報は自分のもとなりきっているので、言行の乖離は起こりにくい。

#### (6) 否定と肯定：4 価的区分とテトラレンマ

日本的コミュニケーションにおいては、2 価的ではなく、普通 4 価的な区分をしているようだ。肯定表現が 2 段階、否定表現が 2 段階あり、これら 4 段階を峻別している。

- a (よく) 知っている      大好きである      おもしろかった
- b 少し知っている      まあ好きである      まあおもしろかった
- c あまり知らない      嫌いではない      あまりおもしろくなかった
- d (全然) 知らない      (大) 嫌い      (全然) おもしろくなかった

他に、テトラレンマ（四句分別）と呼ばれるレンマも使用している。

- a [肯定]      好きだ
- b [否定]      嫌いだ
- c [両者の肯定]      確かに好きだけど、嫌いでもある
- d [両者の否定]      好きも嫌いもない

片立型を多用する英米型コミュニケーションでは、2 価的区分を多用し、2 分法 (dichotomy) に頼りがちである。否定 / 肯定が明瞭である。言語化される前に、頭の中で四捨五入している感じがする。

#### (7) コミュニケーションの継続意思の弱さ

日本人が両立型に流れて、情報コードから情報源コードに転換し、情報同士の対立関係を回避してしまうには、何か理由があるのであろうか。アメリカ人も、イングランド人も、日本人ならばもうこれは口論、口喧嘩だと思って、嫌な感じにいるのに、「今日は本当にいいディスカッションをした。ありがとう」などと言ってくる。喧嘩の基準が違うのである。罵りや呪い言葉が少ない日本語では、普通の日常語を用いて「喧嘩」をするが、英米ではあれでは「喧嘩」にはならないのであろう。日本人は平均的に、対立関係のままでコミュニケーションを持続さすのは苦手な者が多いことを知っておくべきであろう。

#### (8) 情報の並行的残存性：オモテとウラ

両立型の情報は実にしぶとく生き続ける。社会のオモテ舞台から消えても、ウラで立派に生き続けるのである。そしてやがて機が熟せば、再びオモテ舞台へ復活するやも知れないのである。片立型が、旧情報を新情報に取って変わられ、情報の交換を特徴とするのに比べ、両立型の情報処理は足し算のみであり、引き算がないのである。情報は多種併存的、同居的、共生的となり、重層的な構造をとる。表皮をめくれば、歴史の深層が、まるでたまねぎの皮をむくように層状を成している。中国では消え絶えたものが、日本では生き続けていたりする。雅楽などがよい例である。天皇制もこれに入る。西洋音楽が入ってきても邦楽が消えることはない。たとえば学校音楽で教えなくても、正月には洋楽がテレビに流れることはない。この日は邦楽の日でもある。まるで間欠泉のように復活する。慶事に邦楽は付き物である。慶事の神道、弔事の仏教。情報も文化も共生的に生き続ける。まるで、島に椰子の実が流れ着くように、新しい情報は海外から「流れ着き」この列島に住み着く。

#### 4. 日本のコミュニケーションの戦前・戦後

—— 日本のコミュニケーションは変わったか ——

##### (1) 日本人と英語

太平洋戦争を挟んで、日本の多くのものが変わった。その中でも大きく変わったのが日本語である。戦勝国アメリカ合衆国の制度と文化が凄まじい勢いで島国日本へ流入した。新制中学制度がしかれ、義務教育として、実質的には国民全てが英語を学ぶことが前提となる国造りに向けて走りだした。大きな影響があって当然である。日本の義務教育が成功すればするほど、英語が日本文化の広い分野と層にわたって影響があってしかるべきであろう。この制度は、言わば、自国文化が外国文化からの浸食を受けることを当然とする文化政策である。国民の多くが英語に長けて、使えるようになればなるほど、英語文化という異文化の影響を受けざるをえないという矛盾をはらんだ制度なのである。

数学と比較して見れば、事実はなお一層明白となる。数学教育が成功し、国民の社会生活の広い分野を潤している。数学も、日本文化を変えているのである。偏差値教育と呼ばれ、日本の入学制度は人気が悪い。事実上、高等学校教育が「準義務教育」となり、日本の数学教育が一応成功した結果の現象である。「読み・書き・そろばん」日本版3R'sの成功(!)例であろうか。

##### (2) 日本人の異文化交流史：瞥見

歴史的に見れば、日本はこれまでに4回の大きな異文化浸食を経験している。むしろ、異文明の浸食と呼んだ方がよかろう。スケールが大きいのである。異文化接触・異文化交流ではあるが、その4回のうちの3回は、当時の日本よりは高度な文明であった。日本人の異文化交流は文明志向であったと言える。水は高きより低きへ流れる。

日本の有史以来、最初に登場するのが中国文明である。仏教を中心とする文明である。仏・儒・道という宗教・思想だけにとどまらず言語、科学、工学、建築、土木、美術、音楽等々、全てにわたる高度文明であった。私事で恐縮であるが、先日、中国や韓国からの留学生と話をしていた、「五十歩百歩」とか「青天の霹靂」とか「四面楚歌」など、中国語源の多くの表現が、今も東アジアの共通の言葉として通用することに、ある種の感動を覚えた。考えずとも、当然のことながら、中国文明抜きで日本文化は語れない。

南蛮文化は西ヨーロッパ文明との初めての出会いによって日本にもたらされた。この交流は銃とキリスト教に偏った交流であった。日本人は銃の技術を吸い取ってしまうと、キリスト教を弾圧し、海外へ押し返してしまった。日本とヨーロッパとの間に文明的落差が比較的小さかったことにも起因している。南蛮文化とは、ヨーロッパにとってのオリエンタリズムのように、日本人にとっての異国趣味の域を越さなかったのではないか。

次いで日本が経験したのは、幕末・明治維新期の西欧文明との2度目の接触・交流である。文明的落差を痛感した日本人は、薩・長を除き、戦わずして西欧文明に敗れた。大砲の「威力」に、もっと正確に言えば、大砲のイメージ、西洋の「威力」のイメージに日本は敗れた。



富国・強兵政策を取った歴代政府は、イギリスやプロシアに範を採る。日露戦争に勝って、日本は世界の大国として欧米諸国に肩を並べるところまで到達する。「強兵」政策の「成功」である。尚武の国日本。義務教育の中心科目が日本精神の育成と武道であった。

空爆に始まり、空爆で終わった太平洋戦争。今度は、爆弾の「威力」に敗れた。新型爆弾のイメージ、アメリカの「威力」のイメージに敗れた。小銃・大砲・爆弾とエスカレートし、結局西洋に敗れ去った「尚武の国日本」は、強兵政策を捨て、「富国日本」を目指す。コミュニケーション論的に言えば、ヘゲモニー型よりインタレスト型への政策転換である。新制中学において国民「皆」英語教育も始まった。「宗主国」アメリカの誕生である。大きな国アメリカ、小さな国日本。拡大する西洋コンプレックス。

そして半世紀が過ぎた。まるで日露戦争終了時から太平洋戦争敗戦までの日本を連想してしまう戦後のバブル経済期。またしても、やはりアメリカに敗れたかの思いがする。そして、強兵政策を捨て、今度は富国政策を捨て、なお日本の低迷が続く。富国・強兵政策には常に競争する「敵」が存在した。日本が求める国連中心主義とは一体何か。それは単に、独立国としての主体性の放棄ではないのか。国際調整機関に、一体、主体性など持てるのであろうか。

### (3) 消失した階層：武人社会

士農工商という身分制度が廃止されても、太平洋戦争敗戦までの日本には、軍人階層があった。軍人は社会の上部階層として広く社会に認められ、尊敬を受けていた。現在でも、世界の主流は敗戦前の日本社会と同じである。主要国の中でただ日本だけが例外的に軍人階級をもたない。他の国々では、軍人として成功した人材は、次いで政治家として活躍することも多い。日本の国会議員の中で、自衛隊幹部出身の政治家は一体何名いるだろうか。都道府県知事、地方議会議員では、皆無に近いのではなからうか。

戦いに備えるということは、対立的拮抗精神の育成を前提にしている。片立型対立/同化構造のコミュニケーションなのである。命令の遵守、徹底的抗戦など、全てが片立型社会である。この武人文化が欠落しているのが現代日本社会なのである。

変わって戦後登場したのがサラリーマン階級、特に営業マン階級である。コミュニケーション論的に言えば、インタレスト型人間そのものである。江戸時代のサラリーマン化した武士階級、それを引き継いだ軍人階級、また人口的には最も多かった農民階級にかわって、新しく登場した階層である。また、専業主婦という階層も加わった。

政治家も変わった。倫理・美意識の低下は、本来政治はヘゲモニーの世界であるにもかかわらず、経済重視政策ともあいまって、政治家自身のインタレスト型への変化が見られる。「武士は食わねど高楊枝」型から「花より団子」型への転身である。

日本の学校教育には、宗教を中心とした倫理・道徳教育はない。戦後アメリカから移入した民主主義も日本化して、「皆で渡れば怖くない」というレベルまで低下した。選挙で選ばれる立候補者も、棄権をする有権者も、「皆で渡れば怖くない」のであろう。

## 5. 英語化する日本—文化変化する日本：結論

英語文化圏のコミュニケーション文化を特徴付けている片立型コミュニケーションからの影響が日本的コミュニケーションに影響を与えているかと尋ねられれば、答えは「否」である。自己主張型である、自説を譲らず、情報コード上でのコミュニケーションを持続する片立型への志向性は、むしろ後退しているのではないかと思える。

現在のところ、英語の日本語への影響は語彙レベルの表層面に限られ、文化を変える深層までは届いていない。言語学的には、語順を変え、発音を変えるところまでの影響がなければクレオール化は起きない。本稿ではコミュニケーション論からの考察を試みたが、日本文化は、いまだに先進国家への劣等意識を持ち続けてはいるが、健全な日本文化への帰属も同時に有しており、両立型文化の特性である、高度文明への憧れ（タテマエ）と辺土日本（ホンネ）との間を揺れ動く振り子運動のアンビバレントな状態にある。若年期には海外（アチラ）に振れ、成人してコチラに戻る。この日本回帰は日本人の二重基準をよく物語っている。日本文化の危機として「英語化」を捉えるならば、両立型文化の特性を失いつつあるという検証が鍵となってくるのではないか。

## 参考文献

- Prosser, Michael H. (1978) *The Cultural Communicator*, in Fischer, H. D. & Merrill, J. C. (eds) *International & Intercultural Communication 2nd Edn.*
- 遠山 淳 (1981) 日本のコミュニケーション型の国際性『英語教育』1981年12月号(大修館書店)。
- \_\_\_\_\_ (1988) 文化の生成過程：その1—情報代謝モデルを考える—『社会学論集』(桃大総研)
- \_\_\_\_\_ (1989) 文化の生成過程：その2—情報淘汰とコミュニケーション型—『社会学論集』(桃大総研)。
- \_\_\_\_\_ (1989) 日本文化と両立型コミュニケーション『異文化コミュニケーション研究』(神田外語大学異文研)。
- \_\_\_\_\_ (1991) 日本文化の安定と変化『国際文化論集』(桃大総研)。
- \_\_\_\_\_ (1993) 日本文化とコミュニケーション『日本人のコミュニケーション』(桐原書店)。
- \_\_\_\_\_ (1994) 日本のコミュニケーションの元型—民族誌的一考察—『異文化コミュニケーション研究』(神田外語大学異文研)。
- \_\_\_\_\_ (1995) 否定と肯定—情報代謝モデルを求めて『体験的異文化コミュニケーション』(泰流社)。
- \_\_\_\_\_ (1997) 『異文化コミュニケーション・ハンドブック』(共著)(有斐閣)。
- 吉田民人 (1978) 『自己組織性の情報科学』(新曜社)。